

Explat

特定非営利活動法人Explat www.explat.org

2015年設立。特定非営利活動法人Explat(エクсплаット)は舞台芸術制作者を中心とした芸術に関わる専門人材が、自らの仕事に誇りを持ち、心身ともに健康で、生涯の仕事として続けられる労働環境の実現に寄与することを目的とし、専門人材への研修機会の提供、労働環境の整備のための活動・事業を行う。

これらの活動を通じ、芸術を社会とつなぐ専門人材の社会的認知度とその役割の重要性を広く普及啓発することで、芸術活動全体の活性化を図り、文化芸術の進展と社会全体の利益の増進に寄与することを目的とする。求人／求職情報の提供、学生にむけたインターンシップ合同説明会、ファースト・キャリアへ向けた就労スキル訓練のための講座等を実施。

bench

一般社団法人ベンチ bench-p.com

一般社団法人ベンチは、演劇やダンス、アートプロジェクトのプロデュースやコーディネートに関わる舞台芸術制作者を中心に2021年に発足した、アートプロデューサー・コーディネーター・マネージャーのコレクティブ。アーティストと芸術の創造性を膨らませ、芸術と社会をつなげるチームとして、各種芸術文化に関わる事業の企画・プロデュース、コーディネート、マネジメントを担うと共に、現場から生まれる様々なクリエイティビティ、ノウハウ、情報、浮かび上がる課題をチーム内外でシェアし、支え合うことで、アートマネージャーの役割や可能性の拡張を目指す。以って、持続可能で豊かな芸術創造および社会における創造的な時間・空間を創出していく活動を展開していく。

アートマネージャー・メンターシッププログラム「バッテリー」
公式サイト：battery-am.studio.site | Twitter：[@Battery_AM](https://twitter.com/Battery_AM) | Facebook：[BatteryAM](https://www.facebook.com/BatteryAM)

公益財団法人セゾン文化財団 www.sezon.or.jp ARTS COUNCIL TOKYO 

〈主催〉NPO法人Explat、一般社団法人ベンチ 〈助成〉公益財団法人セゾン文化財団、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京 〈「バッテリー」事務局〉NPO法人Explat
活動ドキュメント 〈企画・制作〉NPO法人Explat、一般社団法人ベンチ、株式会社ボイズ 〈編集ディレクション・執筆〉及位友美(voids) 〈編集〉安部見空(voids) 〈デザイン〉内田圭 〈イラストレーション〉ふくしみさと(Folk.)



バッテリー
Battery

WHAT IS

バッテリーとは？

「バッテリー」は、舞台芸術分野の制作者(アートマネージャー・プロデューサー・コーディネーターなど)のうち、劇団・ダンスカンパニーなどの制作者およびフリーランス(組織との雇用関係がない)として活動している方にフォーカスしたメンターシッププログラムです。

舞台芸術業界において、作品創造の母体となる劇団やダンスカンパニーなどの役割は非常に重要であり、アーティストがアーティストとしての創造的な活動に注力するためにも、その活動を支える制作者の存在は欠かせません。いわば舞台芸術を社会に送り出す豊かな源泉、土壌を自由につくり出し、芸術的、社会的な価値を生み出す存在ともいえます。

しかし一方で、劇団・ダンスカンパニーやフリーランスの制作者たちは、何か問題が起きた際、解決のために気軽に相談したり、具体的にサポートを求められる相手がすぐ近くにいない、そもそも誰に相談すればいいかわからないなどの課題があり、これは個人の力のみで解決し得るものではありません。

NPO法人Explatと一般社団法人ベンチでは、このような舞台制作者をつなぐ直接的な支え合いのネットワークを構築することが、次代の新たな舞台芸術を生み出す一助になると考え、このメンターシッププログラム「バッテリー」を2022年から実施しています。

バッテリー【battery】とは、野球で投手と捕手のコンビのことを指します。また充電・蓄電の意味もあり、このプログラムを通じて、メンターと参加する舞台制作者同士のネットワークを構築し、次代を担う制作者たちが自身の活動のための力を蓄えてほしいという意味が込められています。

参加者が現在向き合っている／活動しているフィールドそのものを育成の場とし、メンターチームがもつ経験とネットワークによって支えることで、人が育ち、持続可能な活動と未来への活力へとつなげることを目指しています。

舞台芸術分野の制作者にフォーカスした
メンターシッププログラム

制作者をつなぐ直接的な支え合いの
ネットワーク

本「バッテリー 第2期 活動ドキュメント」は、バッテリーでの1年間の活動を、主に「メンタリングトピック」のご紹介を中心に、各「イベントレポート」や、ラストピッチでの「座談会」をとおして記録したものです。

事業のドキュメントにとどまらず、バッテリーをとおした舞台芸術業界の知見、経験のアーカイブとして、多くの方にご活用いただける冊子になりました。ぜひご一読ください。

WHAT IS BATTERY?

バッテリーとは？	03
メンティー⇄メンターのバッテリー	04
メンターシッププログラムとしてのバッテリーの特徴	06

MENTORING TOPIC

メンタリングトピック

「働き方」編	08
「カンパニー／クリエイション」編	10

EVENT REPORT

イベントレポート

ファーストピッチ1・2／中間報告会1～3	12
勉強会①・②	13
公開レクチャー第1～3回／ラストピッチ	14

ROUNDTABLE

ラストピッチ座談会	16
-----------	----

COLUMN

コラム

アルムナイコラム	17
メンターコラム	18

SCHEDULE

年間スケジュール	19
----------	----

メンティー⇄メンターのバッテリー

Mentee

3年以上の舞台制作者としての経験をもつ、概ね20歳～35歳のメンバー。フェスティバルやプロダクションの制作に関わるフリーランス、劇団に所属する制作者、責任者、自身で企画・制作を行うアーティストなど、多様な立場のメンティーが、公募と選考を経て集いました。

Mentor

豊富な経験をもつ舞台制作者。Explatとベンチのメンバーが中心となって務めます。メンティー1名に対して、応募時の希望や選考時の情報などをふまえて2名以上のメンターをマッチング。日々連絡を取り合い、メンティーの日常的な活動に対するアドバイスなど、適切なサポートを行いました。

バッテリー 01

石塚晴日 活動拠点:東京都



Mentee

1997年、新潟県生まれ。千葉大学教育学部卒業。卒業後は、小学校に教員として勤務しながら、演劇活動を行っている。ベベベの会に所属し、制作と俳優を行う。「持続可能な創作活動の方法」と「上演にとどまらないクリエイションの活用方法」を探索している。

武田知也 一般社団法人ベンチ



Mentor

守備範囲 プロデュース 公立劇場 フェスティバル/地域 子ども ファンドレイズ

1983年、横浜市生まれ。舞台芸術プロデューサー。これまで「フェスティバル/トーキョー」の立ち上げや、ロームシアター京都の開設に従事する。2018年より、フリーランスとしてロームシアター京都事業・企画担当、「さいたま国際芸術祭2020」キュレーターなど。舞台芸術制作者オープンネットワーク (ON-PAM) 副理事長。埼玉県川越市にてまちづくり・場づくりを手掛ける合同会社オンドメンバー。一般社団法人ベンチ代表理事。

小森あや 一般社団法人ベンチ



Mentor

守備範囲 舞台芸術制作実務全般 コーディネート 多分野協働 アートプロジェクト 野外劇

北海道生まれ。武蔵野美術大学空間演出デザイン学科卒業後、アートユニット「明和電機」に在籍。その後、フェスティバル/トーキョーや、TASKO inc.を経て、一般社団法人ベンチに参加。パフォーマンスアーツを中心に、観客と作品をつなぐ空間と制作環境をつくり続けている。近年の参加作品に、小尻健太+森永泰弘『ころり』(2022)、『未練の幽霊と怪物ー「挫波」「敦賀」ー』(2021)、小泉明郎『縛られたプロメテウス』(2019)がある。

バッテリー 02

大川あやの 活動拠点:東京都、香川県



Mentee

譜面絵画制作。旗揚げ公演からすべての公演で制作をつとめ、舞台写真の撮影も行っている。日本大学芸術学部演劇学科企画制作コース卒業。大学3年時にイギリスへ留学し、帰国後は株式会社precogにアシスタントとして勤務。演劇以外の世界も経験してみたいと考え、大学卒業後、瀬戸内海の島に移住、就職し、譜面絵画の活動も続けている。

藤井さゆり 一般社団法人ベンチ



Mentor

守備範囲 舞台芸術制作実務全般 フェスティバル コーディネート 多分野協働 アートプロジェクト 海外招聘

1985年、神奈川県生まれ。アートコーディネーター、プロデューサー。日本大学大学院理工学研究科博士前期課程建築学修了。2011年より「フェスティバル/トーキョー」にて制作スタッフとして勤務。都市空間で展開するパフォーマンスや演劇プロジェクトの制作・マネジメントを担当。2014年からはフリーランスとして様々なアートプロジェクト、パフォーマンスアーツフェスティバル等のコーディネーター・制作、若手育成事業の企画制作等を行う。

藤原顕太 特定非営利活動法人Explat/一般社団法人ベンチ



Mentor

守備範囲 福祉 法人設立 ネットワーク コーディネート 人材育成

1980年、神奈川県生まれ。舞台芸術制作者、社会福祉士。2006～16年有限会社ネビュラエクストラサポート(現・株式会社ネビュラエンタープライズ)にて宣伝代行や制作者の人材育成など、舞台制作の支援に関する様々な仕事を担当。2017年から福祉と舞台芸術に関わる活動を始め、障害のある人の芸術活動支援や、高齢者福祉施設でのアーティスト・イン・レジデンスプログラム「クロスプレイ東松山」の企画等に携わっている。

バッテリー 03

関あゆみ 活動拠点:東京都



Mentee

東京都生まれ。アートプロジェクトの運営、舞台芸術や映像作品のコーディネート、カルチュラル・スタディーズの手法を用いたリサーチを行う。近年は東京アートポイント計画「KINOミーティング」のマネジメントに関わる。セーフスペースとしての制作現場運営を実践中。

×

清水翼 一般社団法人ベンチ/株式会社カンカラ社



Mentor

守備範囲 舞台芸術制作実務全般 劇団運営・経営 野外劇 海外公演・ツアー 関西

1981年、宮城県塩竈市生まれ。主に舞台芸術分野の制作者。京都橘大学文化政策学専攻科博士前期課程修了。2007年から2017年まで、大阪を拠点に野外公演を行ってきた劇団・維新派に制作として所属する。劇団の解散後は、維新派に関するアーカイブ活動を継続しながら、「あいちトリエンナーレ」や「KYOTO EXPERIMENT」に携わる。関西を拠点に舞台芸術のマネジメントを行う、株式会社カンカラ社を運営。

丸田鞠衣絵



Mentor

守備範囲 舞台芸術制作実務全般 創作団体制作 フェスティバル 公共劇場 文化政策 文化人類学

1983年、札幌市生まれ。舞台芸術制作者。京都造形芸術大学(現京都芸術大学)卒業後、舞踏カンパニー・山海塾や、コンテンポラリーダンス、演劇の制作に携わる。街を歩きながらライブとの出会いを楽しむLAND FESの運営や、「あいちトリエンナーレ2016」コーディネーター等を経て、札幌文化芸術劇場事業課に勤務。現在は札幌を拠点に舞台芸術の制作者として活動している。

バッテリー 04

長井望美 活動拠点:東京都



Mentee

人形劇団・ねむり鳥主宰。人形つかい/人形美術家であり、人形を基軸にしたパフォーマンスの企画制作者でもある。金沢美術工芸大学在学中に、人形劇に出会う。舞台美術家の堀尾幸男氏、人形つかいの黒谷都氏らのもとで修行。音楽家や道化師、現代サーカス演出家などの共同創作や、国際人形劇フェスティバルへの参加に実績をもつ。独自性を保ちながら、活動を継続・発展させていくことを模索中。

×

植松侑子 特定非営利活動法人Explat



Mentor

守備範囲 舞台芸術制作実務全般 組織経営 業務効率化 フェスティバル 海外公演・ツアー 新しい働き方

1981年、愛媛県生まれ。特定非営利活動法人Explat理事長/合同会社syuz'gen代表社員。お茶の水女子大学文教育学部芸術・表現行動学科舞踊教育学コース卒業。在学中よりダンス公演に制作アシスタントとして参加。卒業後は一般企業や「フェスティバル/トーキョー」などの現場を経て、現在は主にフリーランスの制作として様々な劇場・組織・劇団と協働。芸術を社会と結ぶことを「政治学」の観点から考え中。

松宮俊文



Mentor

守備範囲 舞台芸術制作実務全般 コーディネート 多分野協働 アートプロジェクト クリア 表現の場

1985年、東京都生まれ。埼玉県育ち。アートコーディネーター。多摩美術大学大学院美術研究科博士前期課程デザイン専攻情報デザイン領域修了。これまでに、公益財団法人現代人形劇センター制作や、NPO法人アートネットワーク・ジャパン「フェスティバル/トーキョー」制作、「東アジア文化都市2019豊島 舞台芸術部門」制作を担当。主に劇場外の舞台芸術プログラムに関わる。2020-2023年松山ブンカ・ラボ プログラムオフィサー、愛媛大学社会共創学部 研究員。

アルムナイ

第1期

2022年1月～12月

新垣七奈 活動拠点:沖縄県

牛島青 活動拠点:高知県

金井美希 活動拠点:東京都

河野遥 活動拠点:東京都

柴田聡子 活動拠点:東京を中心に神戸、京都など関西でも活動

メンターシッププログラムとしての
バッテリーの特徴



メンターは複数体制



**普段の活動や仕事について
メンターに相談できる**



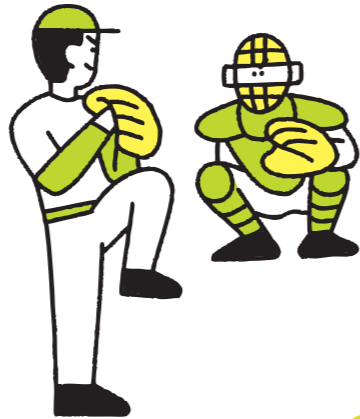
メンティー同士の交流も



経験と知識の共有



**充電・蓄電の意味もある
バッテリー**



**野球の投手と捕手の
コンビのような関係**



**対話・意見交換の
プラットフォーム**



**メンティーは全国から参加
オンラインでつながるネットワーク**

MENTORING TOPIC

メンタリングトピック

「働き方」編

TOPIC 何をして生きていく?

近年、組織で疲弊する同業者を多く目にするためか、「組織離れ」の傾向もあるそうです。組織で働くことが自分のキャリアにつながるのか?と漠然とした不安をもつメンティーも。複数の組織を経験したメンターからは、選択肢を増やすこと、タイミングを見極めることなどについて、アドバイスがありました。

Mentee

今後、自分は何をして生きていくんだろう?と漠然と考えてしまうことがあります。制作者としての仕事は、劇団活動だけでいいと思っているけれど、制作者としての活動以外のことに挑戦したい気持ちや興味はあります。現在の就職先での仕事も、自分が思い描いていたイメージと離れてしまい、潮時かなと感じはじめてもいて—。

Mentor

組織だからこそ築けるものもある

● 転職のタイミングを見極めよう

「自分がやりたいこと」は何なのか。様々な経験を積まなければ、はっきりと見定めることが難しいテーマです。選択肢を増やすという点では、転職を視野に入れてもよいでしょう。仕事の内容だけでなく、働き方の向き・不向きも、経験によって見えてくる場合があります。劇団活動を続けていくうえで、創作環境を支える公共劇場や、演劇やアートのことを深められる仕事を探す選択肢があれば、積極的にアプローチしてみましょう。

一方で、今の仕事・組織で得られることを、もうすこし整理して考えてみるのもいいかもしれません。今の組織にいるからこそ築くことができるネットワークや、知見、劇団に還元されることはありませんか? 前向きに転職したい先が見えてきたら、本格的に転職活動を始めても遅くはないかもしれません。

TOPIC もっとクリエイションの現場に入りたい

生活のための「仕事」と、創作や芸術分野での「活動」を、分けて考えるメンティーも。そういった働き方を選ぶ若い人たちも増えてきたと、メンターたちは話します。一方で、もっとクリエイションの現場に入りたい思いを抱えるケースもありました。お金も時間も無限ではないなか、現場との出会いも楽しもうとアドバイスがありました。

Mentee

舞台芸術以外の分野の仕事で収入を確保し、自分の取り組みたい芸術分野の活動をしています。もっとクリエイションの現場に入りたい思いもあります。芸術分野の仕事の依頼に備えて、スケジュールを空けておくことができればいいのですが、いつくるかわからない仕事のためにスケジュールを空けるということも難しく—。

Mentor

生活のための「仕事」と、「活動」を分けてもいい

● どんな現場も、経験と成長を積めるチャンスになる

生活のための「仕事」と、自分の取り組みたい芸術分野の「活動」を、金銭的にも時間的にも上手にバランスを取って取り組んでいる現状を、まずは肯定しようとメンターからはフィードバックがありました。

お金の面でも、時間の面でも、自分がやりたいことだけで生きていくのは簡単ではないでしょう。フリーランスの場合、「定期的な収入源」となる仕事以外は、依頼がくるタイミングも見えにくい。今後の心構えとしては、自分が関わってみたい分野や作品、アーティストとのネットワークをつくったり、動きを意識したりすることで、可能性が広がるかもしれません。

思い通りの現場に入れないときにも、舞台制作の仕事は、人として成長するための経験を積める場です。出会いを楽しみながら、今後どんな人生をおくりたいかをイメージしていこうと、アドバイスがありました。

舞台芸術制作者・アートマネージャーとしての仕事や生活—。

バッテリーでは、メンティーたちからはどのような悩みが共有され、どのような事例が共有されたのか。

バッテリーでのメンタリングをとおして可視化された、若手舞台芸術制作者たちが直面する

アクチュアルなテーマの事例をご紹介します。

TOPIC 一人何役も兼ねて活動する

企画者/アーティスト/パフォーマーのすべてを兼ねて、活動をしているメンティーもいます。舞台芸術業界のなかでも、小規模な団体などの場合、そういったケースも見かけます。バッテリーでは、一人が何役も兼ねて活動するときの課題にフォーカスし、メンタリングを行ったチームもありました。

Mentee

企画者、アーティスト、そしてパフォーマーとして活動をしています。助成金申請書を書くときや、プレゼンテーションをする際に、アイデアや伝えたいことはたくさんある。ですが複数の視点からの考えが、ブレインストーミングの嵐のように吹き荒れてしまい、何が重要なのか、どの方向へ進むべきかが分からなくなってしまいます。

Mentor

相手が聞きたいことを話そう

● 自分が今どの立場で話しているかを整理する

企画者、アーティスト、そしてパフォーマー。それぞれの顔をもっていることは強みでもあります。一方で、その多様性が課題になることも。あれこれ考えが渦巻いて、伝えたいことを見失いそうになるのを防ぐために、ポイントを整理しようというアドバイスがありました。具体的には以下の3つ。

- 1 話したいことではなく、相手が聞きたいことから組み立てる。各役割が異なるメッセージをもつ場合、役割ごとのゴールを明確にしよう。相手が聞きたいテーマを把握し、各役割のうちメッセージが強いものを手段として選ぶのも○。
- 2 クリアな目標を立てる。達成したいゴールに向かって話を進めれば、焦点が絞りがやすくなる。
- 3 重要なポイントを絞る。簡潔さが重要となるプレゼンや応募書類では、本当に伝えたい要素を限定して、優先順位が低い要素は削いでいこう。

TOPIC 活動のステップアップを考える

演劇における「成功」モデルも、時代によって変遷してきました。2020年のコロナ禍以降、舞台芸術をめぐる環境や国際情勢も一層不安定となり、どのようなステップアップをしていくべきかが見えにくくなったという声が、メンティーから挙がりました。

Mentee

大学を卒業したのが、ちょうどコロナ禍が始まった時期でした。コロナをきっかけに、劇団や劇場の集客が減っていると聞くことも多いです。自分の劇団で海外公演をしてみたいとも思いますが、なかなかリアリティがもてません。劇団にとって、ステップアップのプロセスをどうつくるべきなのか、考えています。

Mentor

活動のステップアップモデルを自分たちなりに考えよう

● 目指すべきたちは人それぞれ

集客を増やし、大きな劇場で公演を行い、俳優がテレビや映画にも出演するようになるのが80~90年代。作品の芸術性が評価され、国際フェスティバルや海外の劇場から多く招聘されるようになり、活動が安定するというのがゼロ年代~10年代の成功モデルだとすれば、これからの時代における成功とは何なのか—。皆が悩み考えるところではないでしょうか。

メンティーたちが描く将来像のなかには、自分たちの拠点をづくり、芸術性を保ちながらも、作品創作だけでなく土地やコミュニティに根ざした活動を行う、といったイメージもありました。どのような形態であれ、演劇の本質や技術を追求し、それを活かした活動を展開する先に、次代のモデルとなり得るブレイクスルーがあるのではないかということが確認されました。

「カンパニー／クリエイション」編

TOPIC カンパニーの集客規模を考える

「集客」に関する悩みも、複数挙がりました。

カンパニーのファンをどうつくっていくか、カンパニーの集客規模感をどのように設定すべきか。

自分たちの活動を言語化することで、見えてくるものもあります。

他ジャンルへと活動が広がることも、創客に結びつくだろうと議論が深まりました。

Mentee

必ずしも演劇だけで食べていきたいわけではありませんが、持続可能な活動のためには、演劇でも一定のフィー(報酬)を発生させる必要があるのではないかと考えています。そのためには、基本的なこととしてお客さんを増やしていきたい。どうすれば集客に結びつける活動ができるか、悩んでいます。

Mentor

演劇コアファン以外の、
新たな観客層の可能性は？

👉 目指すべき集客規模を明確にして考えよう

どれぐらいの集客を目指していくのか、まずは目標設定をしてみましょう。自分たちの作品の特性を考え、予算規模や集客の可能性を見積り、収支バランスを検討することから始めます。

同時に、自分たちはどのような団体であり、どのような作品をつくっているのかを言語化し、それを徹底的に磨いて発信することも重要です。その先に、どのような観客と、どのようにつながりたいか、ということが見えてきます。

コロナ禍を経て、演劇のコアな観客層は減っているかもしれません。一方でメンティーたちのなかには、自身の劇団がほかの芸術ジャンルや、まちづくり、教育などの分野とのコラボレーションに可能性を感じている人もいました。独自のコミュニティやネットワークづくりをしていくことも、創客の一つと言えるでしょう。

TOPIC オファーの受け方

カンパニーで活動するとき、委託公演であれば主催者、助成事業であれば助成元など、

多様なステークホルダー(あらゆる利害関係者)とのやり取りが生まれます。

ジャンルによっては子弟関係と、活動を切り離すことが難しいケースも。

ステークホルダーとの関わり方、バランスに関する悩みも挙がりました。

Mentee

昔お世話になった方から、新しい機会のオファーをいただきました。依頼をいただくこと自体は光栄で、感謝もしていますが、条件が整っていないことが気になりました。そのまま引き受けたら自分がリスクを抱えてしまう場合、どこまで交渉すべきでしょうか。素直に不安を伝えてみるべきか、そもそも引き受けられない方がいいか、悩んでいます。

Mentor

自分の心に正直でいることが大事

👉 活動／作品をつくるうえで譲れないことは？

昔お世話になった方からのオファーは、実力や信頼が認められての声がけである一方で、搾取的な構造になってしまうリスクがあるとも言えます。

まずはどんな条件が整っていれば、自分が安心してプロジェクトに取り組めるかを整理しましょう。どこまでが譲歩可能で、どこからが妥協ができないのか、不安を感じるポイントはどこかなど、具体的に伝えないと相手も気づいていないことがあります。オファーに何かしらの不満がある場合、実際に動き出してから揉める原因になることも。オファーの時点で条件を擦り合わせておきましょう。

最終的な判断は、自分が本気で取り組めるかどうか。本気で取り組みたいなら、交渉や調整をして最良の状態を目指すものよいですが、状況が折り合わないと感じる場合は、引き受けられない選択肢もある、とメンターからはフィードバックがありました。

TOPIC 職種を超えた協働

複数の職種の専門家が集結する、創作の現場。

自分とは違う職能をもつスタッフとの協働や、業務分担を考えるうえで、

難しく感じたことがあるのではないのでしょうか。

舞台芸術の現場に限らず多くの人が関わるプロジェクトの場合に、直面する視点です。

Mentee

現場のなかに、これまで協働したことのない職能の人がいる場合、いつもの自分の仕事のやり方だとうまくいかないと感じることがあります。たとえば、演出助手、ドラマトゥルク、制作者といった役割は、プロダクションによっては細かな業務の範囲が重なったり、あるいは助けあったりする必要があります。どのように協働していくかが課題です。

Mentor

創作の現場は、
複数の専門家による協働作業

👉 それぞれが職能を発揮できるコミュニケーションを意識しよう

規模感が小さな作品では、制作者が多くの役割を担う場合もありますが、プロダクションが大きくなれば、演出助手やドラマトゥルクなどの職能の人と分業することもあります。同じ制作者でも、プロデュースが得意な人もいれば、バックオフィスの業務が得意な人もるように、同じ肩書の専門家でも、仕事の範囲が異なることもあります。

舞台芸術の現場で大切なのは、複数の職能のスタッフそれぞれの仕事に敬意をもち、コミュニケーションしながら進めること。特に初めて一緒に仕事をする人とは、誰がどこまでの仕事を担うのか、漏れや誤解がないよう確認しながら進めていけると良いですね。

また同じ座組のメンバーのなかで、予算や広報、お客さまに関する仕事など、それぞれ誰が最終的な判断を担うのかを共有しておく、問題が起きたとき相談すべき人が明確になります。

TOPIC 健全なカンパニー運営を

カンパニーが活動を続けるために、お金は切っても切れない課題です。

メンティーのなかには、活動のために制作者がお金を持ち出しているというケースも。

パトロン的なサポートというかたちもありますが、一方で、活動を続けていくためには、

どのような環境づくりが必要でしょうか？メンタリングでは様々な可能性が確認されました。

Mentee

活動ごとに予算書をつくり、劇団内で共有してはいるのですが、「アーティストのやりたいこと=制作者が見たい作品」という構図になってしまいがち。赤字になることも多いのが現状です。その結果、制作者がほかの仕事で稼いだお金を劇団に入れることもあり、制作者のフィーの計上も難しい。どのように改善していくべきか悩んでいます。

Mentor

アーティストのやりたいことを
実現するための方法を模索しよう

👉 健全な劇団運営が、将来的に活動を続けるベースになる

アーティストのやりたいことをサポートしたいという気持ちは大切ですが、一方で財源等含め健全な状態で活動を実現可能にしていくことも、制作者の仕事の一つではないでしょうか。

将来的な団体の継続を考えれば、個人が金銭的なリスクを負うことは健全な状態とは言いにくい。今すぐに制作者の報酬が支払えない場合でも、貸付金として計上したうえで、可能なタイミングで支払うようにしていくなどの方法も考えられます。助成金かとれていたとしても、予算の1/3助成などであれば、辞退してでも今は実施しないという判断が必要になることも。

アーティストの思いを理解し、それを最大限活かせる環境をつくっていくために、別のプランを提示したり、実現できるタイミングがつかれるまで企画を温めておくなど、違う回路を模索していきましょう。

EVENT REPORT イベントレポート

メンターとメンティーのチームで行うメンタリングのほかに、プロジェクトメンバー全員で対話をする定期報告会を実施しました。さらに、一般にもひらく公開レクチャーや勉強会の開催も。各イベントの様子をご紹介します。

REPORT ファーストピッチ1

約9ヶ月間の活動のスタートとなる「ファーストピッチ」をオンラインにて開催。緊張と期待が入り混じった空気のなか、まずは自己紹介から始まります。後半は、メンターの植松侑子による「ハラスメント防止研修」。創作現場でのハラスメントは、第1期ディスカッションでも挙げられたトピックです。メンティーが大きくうなずく様子が、度々見られました。研修後はメンティーの緊張も一気にほぐれ、悩みや課題をより一層共有しやすい場に。最後は振り返りや、各バッテリーの個別ミーティングを行いました。



メンターとメンターの集合写真 (ファーストピッチ2にて)

REPORT ファーストピッチ2

オフラインで初の顔合わせとなった2日目。午前中は、現在の自分の状況を説明し、それをもとに他人に目標設定をしてもらう「タニモク」が行われました。午後はメンターの武田知也によるレクチャーからスタート。最後は各バッテリーに分かれてラストピッチまでの計画相談&発表を実施。事前に記入した「ワークシート」をもとに1年間で取り組めること、3年後・5年後・10年後と続いていく未来に向けて準備したいことなど、具体的な課題や目標設定がされました。



ファーストピッチ2の様子

REPORT 中間報告会 1~3

第1回目の中間報告では、各メンティーが、4月のファーストピッチからアップデートされたそれぞれの活動や定期的なメンタリングの内容を丁寧に共有しました。

第2回目は、全員で一つのトピックについて話し合う時間で、メンティーからの提案により「仕事の頼み方/頼まれ方」というテーマを設定。条件や業務内容が明かさずに依頼があった場合、自分から見積もりを提示する、早い段階で詳細をクリアにする場を設けるなどの方法が、メンターから提案されました。また、このようなやり取りは同業者間で行われることが多く、仕事を依頼する側にもなります。お互いに心理的な負担にならないよう、なるべく依頼時に条件面を提示することはもちろん、交渉のタイミングや方法にも配慮することが大切だという話もありました。

第3回目は、チケット料金にまつわる問題意識です。助成金などのサポートがない場合、チケットの価格を上げざるを得ませんが、それだとライトな観劇層は、遠ざかってしまいます。メンバーからは、他ジャンルとのコラボレーションにより観客層を広げることや、創客を意図したカルチベートチケット、レポート作品でインシャルコストを下げるなどの具体的なアイデアが挙がりました。さらに、作品の公共性についても議論は展開。思想の多様性を提示することが芸術文化の役割だとすれば、助成金は政策提言でもある。その設計自体が文化行政をつくることにもつながるという言葉で、締められました。



中間報告会の様子

REPORT 勉強会

今年度のバッテリーでは、レクチャーだけでなく、実践的な学びの場として、勉強会を開催しました。

1回目は、メンティーたちと比べると、活動歴や経験がある二人のカンパニーの制作者に、それぞれの悩みや中長期的な展望などをお聞きしました。様々な諸課題に直面するメンティーが、先行事例をもとに、自身の活動に反映していく時間となりました。

2回目は、制作者なら避けては通れない助成金申請の予算書の立て方。参加者も一緒に作成しながら学ぶ、ワークショップ形式で行いました。ある条件下における予算書を作成し、その後、ほかの参加者と意見交換しながら、予算書をブラッシュアップしていきました。

勉強会①「劇団制作者の役割・葛藤・希望」

ゲスト 坂本もも (プロデューサー/合同会社範由遊泳代表、口口/範由遊泳) 堀 朝美 (舞台制作/プロデューサー、賢沢賢三)

ゲストの活動紹介の後、メンティーからゲストへ質問する形式で勉強会を実施。「主宰者と制作者の役割や責任の分担」「制作者を続けるモチベーション」「集客の創意工夫」など、切実かつ具体的な質問が挙がりました。お二人も、これまでの経験や、現在まで続く悩み、課題をオープンにして、じっくりとお話いただきました。

「大きな企画に挑戦し、うまくいかなかったときの精神的・金銭的な影響をどう乗り越えてきたか？」という質問には、「3桁の赤字を背負い、文字通り夜も眠れなくなったときもあった」と坂本さん。責任感をもつことも大切ですが、制作者一人がすべてを背負うようなマインドから自身を解放し、自己肯定感をもつ重要性にもふられました。

堀さんは「制作者を続けるモチベーション」について、フリーランス時代は心が折れたときもあったそう。ですが「いつか一緒にやりたいと思えるアーティストに出会うはず」という先輩制作者の言葉を信じ活動を続けるなかで、現在ともに活動するアーティストに出会えたと話します。

明るい話題ばかりではありませんでしたが、共通していたのは、面白いと思う作家や作品を間近で支える自負と喜びでした。「演劇をつくることは、人が普段気にとめない些細なことをひたすら考える作業で、不思議だけ面白い」(坂本)、「生みの苦しみは常にありますが、それを作品が乗り越えさせてくれる」(堀)と語るお二人と、制作者の仕事の魅力と悩みを共有する会になりました。



勉強会②「公演予算の立て方」

助成金の申請のために、架空の劇団の公演予算をたててくることを、メンティーの事前ワークに課した勉強会。フォーマットにしたのは、芸術文化振興基金の「創造普及活動」の申請書です。ここで設定した必須条件は、①制作者にギャラを払うこと、②次回公演のことを考えること、の二つ。

まずは、自身が作成した予算書について、どこに注力し、どのような戦略で作成したか、メンティーたちが発表しました。その後、申請していた助成金が採択されず、自主公演になった場

合には、どのように予算を組み直すかをグループワークで再検討する時間をつくりました。

例えば収入面では、チケットの価格を上げる、応援チケットを設定する、公演回数を増やす、物販を行う、公演に関連したワークショップなどの企画で収入を補填する、別の助成金や協賛などを検討することなどが挙げられました。また支出面では、外注していた業務を団体内で行う、外注先には今後の他公演の業務も兼ねたグロスの価格で相談する、あるいは、思い切った配信のみに切り替えることで事業全体の見直し

を行うといった案も。

予算については、普段、ほかの制作者と話す機会はなかなかありません。今回の勉強会は、自分以外の制作者がどう考えるかや価値基準で予算を組んでいるのかを知る機会に。当然のことではありますが、予算はいつも潤沢にあるとは限りません。その状況下で、いかにポジティブに公演を実施するかを、メンターとメンティーみんなで考える時間になりました。

公開レクチャーでは、「明日から実務に生きる！アートマネージャーのためのスキルアップ講座」と題し、アートマネージャーにとって重要なビジネススキルを身につけるため、①ロジカルシンキング、②プレゼンテーションの技術、③PDCAの3つのトピックにフォーカスしてレクチャーを実施しました。

8/8 TUE 第1回「ロジカルシンキング入門」
19:00-21:00 講師 寺澤伸洋

初回となったこの講座は、アートマネージャーがプロジェクトを企画し、アイデアを伝える際によく聞かれる「もっとよく考えて」というフィードバックに焦点を当て、「もっとよく考えるとはどういうことか？」を掘り下げるためのレクチャーとして実施しました。

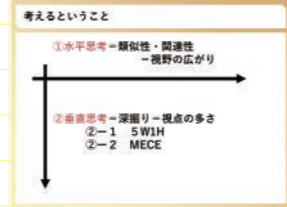
講師に招いたのは、思考法に関する多くの著作をもつ寺澤伸洋さん。寺澤さんの経験と知識をもとに、どのようにして抜け漏れなく、整理された思考を築くかを、「ロジカルシンキング入門」として解説いただきました。

まず寺澤さんは「美味しいカレーをつくるためにどうしますか？」と問いかけます。参加者からは、スパイスにこだわる、いい肉を使う、有名店を研究するなどの回答が寄せられました。様々な回答が寄せられた後で、寺澤さんは次の

視点を加えます。これを食べるのは誰なのか、レストランの雰囲気はどうするのか。「食べてもらった人に満足してもらうために、考えなければいけないことは何なのか」を考えることが、ロジカルシンキングのスタートになりました。

つまりロジカルシンキングは、「何を考えなくてはいけないのか」を整理するところから始まります。その具体的な実践方法(①まずは水平思考で検討すべき要素を洗い出す、②次に①で考えた要素をさらに深掘りしていく方法)について、レクチャーいただきました。参加者からは、「初めはロジカルシンキングが、アートマネージャーの仕事にどう結びつけて理解すればよいのか難しかったが、終盤では意味が明確になり、整理して考えるために自分の苦手な部分が浮き彫りになった」という声が寄せられました。特に公演の運営業務に関し

ては、即座に活用できそうだとの意見も。ロジカルシンキングを実践するうえでの悩みや質問も寄せられたなか、このようなレクチャーが異業種の交流の機会として、新しい刺激を受ける場と感じたという意見もありました。



8/17 THU 第2回「プレゼンテーションの技術」
19:00-21:00 講師 植松侑子(特定非営利活動法人Explat/合同会社syuz'gen)

助成金やプロジェクトの採択プロセスにおいて、プレゼンテーションの重要性が増えています。2回目の講座にはメンターの植松侑子さんが講師として登壇し、限られた時間で最大限に思いを伝えるための「プレゼン技術」に焦点を当てました。

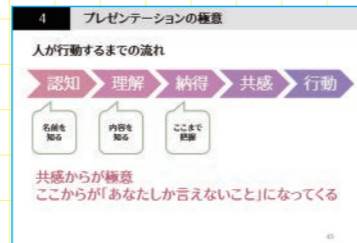
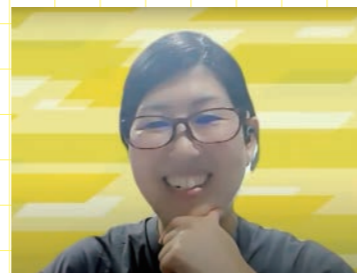
プレゼンテーションは「説明」ではなく、相手に企画や思いを「プレゼント」する行為。聞き手や目的、引き寄せたい未来の結果が、重要なポイントとなります。またプレゼンテーションの場では、聞きたい話を相手に「プレゼント」するだけでなく、プレゼンする側も、その機会や時間を相手からもらっている。「双方向性をもつ時間」なのだという前提が確認されました。

講座の冒頭で植松さんは、過去に多業種との協働プロジェクトにおいて、自身の行ったプレゼン

テーションに対し、「こんなダサイプレゼンテーションで、説得力あると思ってます?」「あなた、他業界の人と話してないでしょ?」と言われたつまづきエピソードを紹介しました。プレゼンテーションでは、聞き手が①興味がない(言っていることが分からない)、②自分には関係ない、③今じゃなくていい、と思ってしまうと、プレゼンする側の思いがうまく伝わりません。それを防ぐために、相手の「頭」ではなく「心」を動かそうと植松さんは話します。

また、思いを伝えるためには「過去」「今」「未来」の3つの視点が重要だという点も参加者に共有されました。レクチャー後のアンケートでは、自分のこれまでのプレゼンが枝葉にこだわりがちであったことや、目的をきちんと意識する必要性に気づき、改善したいという意欲あ

ふれるコメントが寄せられました。また、スライドの調整やプレゼンの練習をサボらないようにしたいという声もありました。



8/29 TUE 第3回「今日から回せるPDCA」
19:00-21:00 講師 岡村拓朗(株式会社センターピン代表取締役)

3回目となる講座では、PDCAサイクルを取り上げました。舞台芸術業界でも、芸術文化振興基金が助成を受けた文化芸術団体に対し、PDCAサイクルが必要であるという視点を掲げています。PDCAをアートマネージャーの仕事に活かすためには、具体的にどのようにすればいいのでしょうか。岡村拓朗さんを講師に招き、PDCAサイクルのPlan(計画)、Do(実行)、Check(測定・評価)、Action(対策・改善)を回すための、基本ルールを学びました。岡村さんが紹介した基本ルールは「見える化」、「仕組み化」、「習慣化」です。

PDCAを回すことは、業務やプロジェクトの効率や品質を向上させる手段となります。これによって、計画したことが実際にどのように進んでいるかを定期的に評価し、問題が発生した場合には早期に気づくことができるのです。

また、このサイクルを繰り返すことで、発見された問題に対する対策や改善策を練り、業務のプロセスやプロジェクトを進化させることができず。そして限られたリソースを最適な状態で活用することで、効率的で効果的な業務の遂行も可能になります。

講座では、ノートを4分割し、フレームをつくりながら日々のPDCAを回す方法が提案されました。まずは1日のスケジュールを最初にPlan(計画)し、それをDo(実行)した結果、どのようにズレたかCheck(測定・評価)をし、どうすればよかったのかをAction(対策・改善)します。そうすることで、アートマネージャーが多忙なために後回しにしてしまいがちな「自分のための時間」を確保することも可能になると、講座のなかで示されました。

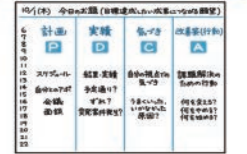
参加者からの感想には、長期的な目標を達

成するために、まず日々PDCAを実践していくことの重要性について学ぶことができたという声がありました。



①知識→上手くいくための視点！
PDCAを回す3つのルール

- 1.見える化
- 2.仕組み化
- 3.習慣化



メンター、メンティーが対面で集まったのは、4月のファーストピッチ以来。無事に全員で、最後の日、ラストピッチを迎えられました。

前半は、バッテリーメンバーだけのクローズドセッションで、まず、モチベーショングラフを使って自身の1年を振り返ります。モチベーショングラフとは、1年間のモチベーションを折れ線グラフにして、それがいつ、どんな出来事でも変化したかを可視化するものです。メンターもメンティーもそれぞれグラフを作成し、今度はそれをもち、心の健康を保ちながら仕事を継続していくためのティップスを話し合いました。芸術活動以外に金銭を得る仕事と、自分がやりたいことにかかる時間やエネルギーとのバランス、余暇の過ごし方、例えば、推し活、フィットネスなど、息抜きやリセットの方法をアドバイスしました。

後半は、一般来場者も対象にした報告会で、舞台芸術の制作者に限らず、劇場や美術業界に従事する人たちが参加していました。報告会では、各メンティーがバッテリー期間で得た学びや、自身の思考、所属する団体に起きた変化について、4者4様、4組のメンタリングごとに報告し、終了後は、来場者も交えた懇親会を経て、次回のバッテリーへとつなげました。



ROUNDTABLE ラストピッチ座談会

ラストピッチの最後は、メンティーとメンター全員で、10カ月の活動を振り返る座談会。
メンタリングを始めたころと比べ、現在のメンティーたちの心境や考え方には変化がみられました。
メンティー×メンターのバッテリーで、どんな対話や取り組みがなされてきたか。
そのプロセスと、現在の心境が共有されました。

それぞれのバッテリーのかたち

メンターA 今日、前半のプレゼンテーションを聞いて印象に残ったのが、メンタリングの印象や取り組んでいたことに、それぞれ特徴があったこと。「道場」「保健室」「談話室」「実家」と、人によって違うんですね。バッテリーは「人材育成」として捉えられることもあります。実際には育成している感じはなくて、その人のメンテナンスに付き合っているような感じなんだよなと、あらためて思いました。

メンターB おもしろいのが、実家の両親というのは、直接的でクリティカルなアドバイスを存在ではないんですね。なんとなく話を聞いてもらって、なにかちょっとしたことが指摘になるような存在だと聞きました。

メンティー1 メンターがそれぞれの視点で、自分の企画について意見をくれることが心強かったです。だからメンタリングは“実家”に帰ってくるような感覚で。

メンターB 1期生として今年のバッテリーにも伴走してくれた、アルムナイのメンバーも今日は会場に来ています。

アルムナイ バッテリーは、みんなが同じ講座を受けるのではなく、それぞれのメンティーに合わせたプログラムになっていくのが魅力だなとあらためて感じました。組み合わせ次第で、ぜんぜん違うかたちになるんですね。

バッテリーでの話題を“言い訳”にしてもいい

メンターC 私たちのバッテリーでは、メンティーの劇団での悩みがトピックに挙がっていました。ある回のメンタリングで、「メンタリングではこういう話が出たんだけど」と劇団のミーティングで話しています、という報告をもらって。バッテリーのような“よりどころ”があることで、個人が抱える悩みを劇団のメンバーにも話しやすくなる側面が

あるんだと、そのとき感じました。「メンタリングでこんなアドバイスがあった」ということを、ある種“言い訳”にしてもらってもいいですね。

メンターA 悩みを相談していきながら、すこしずつ自分自身や劇団のなかで解決していく流れが自然にできていましたね。

メンターC メンタリングでは、毎回メンティーから1~2個の相談トピックがあったんですけど、じつは一昨日、最後のメンタリングではもう「相談」がなかったんです(笑)。ただのおしゃべりで。

メンティー2 振り返ると、抱えていたものを全部出しきって、すっきり最後に片づいていったような1年だったかもしれません。でも2週間に1度話していたあの時間がなくなると、明日から怖いなども感じていて。そういう時間をもつことが重要だったんだと、今気づかされています。だからメンタリングのような機会を今後自分でもつくっていきけるように、人と関わっていきたいと、今は思っています。

メンターの現場に、メンティーが参加

メンターB 第1期のバッテリーにはなかった活動として、今年はメンターの現場にメンティーがつくというケースがありましたね。必然的な流れだったのかもしれませんが、どうでしたか？

メンティー3 アートマネジメントの教育を受けてきたわけではないので、アートの現場はたたき上げのような感じで、よく分からないままやっているようなことがたくさんあったんです。「この業務にはどういう意味があるのか」といった根本的なことは、教えてくれる人の時間を奪ってしまうと考えてしまい、聞きにくいとも感じていました。でも現場にいるのがメンターであれば、いつもより一歩踏み込んで「ここまで聞いてみよう」と思うことができましたね。

メンターD バッテリーの枠組みがあったこと

で、現場での関係性もすこし踏み込んだものになったのかなと思います。ふだんのメンタリングがあったからこそ、メンティーにとって不慣れな部分に分かるので、こちらも業界特有のルールや業務の意図を説明できました。

アーティストによるセルフプロデュース

メンターB バッテリーはアートマネージャーのメンターシッププログラムですが、第1期に続き、第2期にもアーティストがセルフプロデュースをして活動を社会にひらいていくケースがありました。日本には、アーティストに専属のマネージャーなどがつかず、こういったスタイルがとて多いんだということ、バッテリーのプログラムとおして実感しています。

メンターE 私たちのバッテリーは、アーティスト・パフォーマー・企画者という三つの側面をもつメンターの活動を、メンタリングでどのようにサポートしていくかを考えるところからスタートしました。一人のなかにすごい情報量が詰まっているので、それを整理し、どこに行っても使える活動紹介のデフォルトセッティングをつくれれば、財産になると考えて始めたのがプレゼン“道場”でした。「道場」というのも、じつは私たちが名づけたわけではなくて(笑)、あとからこのチームがそう呼ばれていると知ったのですが。最後のメンタリングでは、最初は自信がなさそうだったメンティーが、自分の活動が腑に落ちて、自信と誇りをもって話していました。バッテリーが終わっても「もう大丈夫」だと思っています。

メンターF アーティストとアートマネージャーの視点を、有機的に結びつけるという提案があったのも印象に残りましたね。人に伝えるための言葉をブラッシュアップしていくことで、良いプレゼンテーションが生まれていく過程を、メンタリングではみることができました。

Alumni COLUMN アルムナイコラム

大谷くんを現地で応援しないと私のライフステージが上がらない

「大谷くんを現地で応援しないと、私のライフステージが上がらない」。ここから私のバッテリーは始まりました。当初、「3年以内にアメリカへ大谷翔平選手の応援&語学留学に行く」ことをプライベートな目標の一つにしていました。幸いなことにメンターチームは「それは早く行くしかない!」と思いついて背中を押してくれたので、それはすぐに「1年後」というリアルに変わりました。心のどこかで実現は難しいと考えていた私にとって、この一言はとても大きかったように感じます。

これだけだと、私にとって、バッテリーはプライベートな目的のみで参加したと捉えられてしまうかもしれませんが……アメリカ留学に向けてのプロセスは、私にとってとても重要な時間になりました。

金銭的な部分が不安だったこともあり、バッテリーでは留学資金を工面することも視野に入れ、私自身の仕事の捉え方・制作の職能・他者から見た私自身の価値・ギャランティなど、主に働き方や収入(支出)に焦点をあててメンタリングを行っていただきました。この作業は、フリーランスとしての自分の現在地を知るための作業だったと感じています。

そして今年、無事に4ヶ月の渡米生活を終えました。昨年、あれだけ作戦を練ったのですが、結果的にアメリカ留学は大きな赤字になってしまいました。ですが私にとってはお金よりも大切な、たくさんの「経験」を得ることができました。そして、人生における大きな目標を一つ成し遂げたことは、間違いなく私のライフステージを引き上げる出来事になりました。(あらためて、担当メンターだった藤井さん・小森さんには感謝しかありません……!笑)

最後に、バッテリーのメンタリングは日常になくても平気なものかもしれません。でもその「何気なさ」こそがキープポイントだと感じます。自身の考え方や思考力に客観性をもたらしてくれる、それが私にとっての「バッテリー」です。プログラムが終了した今でも、その客観性は損なわれず、常に第三者が自分自身のなかに存在するような不思議な感覚をもっています。もし一人で悩んでいるような人がいれば、バッテリーを利用するというぐらいの気持ちで参加するのも、良いのかもしれません。

第1期メンティー 金井美希

バッテリーを振り返る

メンティーとして参加したバッテリーが終了して、あっという間に1年が経ちました。この1年は迷走しながらも、アートマネージャーの仕事が続けてきたことをふまえ、このプログラムがどんなものだったのかあらためて振り返ってみようと思います。

一番印象深いのは、2週に1回のペースで行っていたメンタリングです。メンティーによって過ごし方は異なっていたようですが、私の場合は仕事の進捗を報告し、メンターから意見をもらっていました。という固く聞こえますが、実際にはメモメモしたり、愚痴を言ったりする時間の方が長かったように思います。要は、モヤっとした気持ちを吐き出す場だったので、自分が今何を感じていてどんな状況にあるのか、メンターに話して思考を整理してもらうことで、やっと実感できることもありました。

アートマネージャーは、立場上、現場をスムーズに進行させることを優先するあまり、自分が感じた小さな違和感をスルーしがちになってしまうと思います。しかしそれを見逃さず、メンターと一緒に向き合う時間を定期的にもてたことで、小さな違和感が大きな問題になる前に、その芽を摘み取ることができました。特に、知識も経験も少なく、後ろ盾もない、私のようなフリーランスにとっては、この時間が現場でのリスク回避にどれだけ役立っていたか、振り返ってみてあらためて気付かされるのでした。

また、メンターの皆さんは、自分よりはるかにキャリアのある先輩方でしたが、あくまで対等な同業者という関係性で話を聞いてもらえたことも嬉しかったです。私の仕事の進め方に、内心ヒヤヒヤされていたのでは……と今でこそ思うのですが、何かを指図する・されるという上下の関係ではなかったことで、むしろ遠慮せずに些細なことでも相談できました。

バッテリーはメンティー自身のキャリアや私生活のタイミングによっても、受け取るものが大きく変わるプログラムだと感じます。私は当時、フリーランスとしての第一歩を踏み出したばかりで、この仕事を続ける自信がありませんでした。バッテリーに参加することにも迷いはありましたが、「えい」と飛び込んでみた先で出会ったメンターの皆さんに背中を押してもらえたこと、そして同世代の心強い仲間ができたことが、今につながっています。

第1期メンティー 柴田聡子

Mentor COLUMN

メンターコラム

ゆるやかな縦と横と「斜め」のつながり

『バッテリー』のスタートは、コロナ禍の落ち着き気配もない2021年の初夏でした。一般社団法人ベンチの武田さんとオンラインで話すなかで、次世代に現場を渡せていないことへの課題感が共通点として浮かび上がり、それがこのメンターシッププログラムの構想につながりました。その後、セゾン文化財団、アーツカウンシル東京のサポートを得て、昨年第1期が立ち上がりました。

昨年の第1期も十分に活動の手ごたえはありましたが、さらにいくつかのブラッシュアップを行い、メンターメンバーも二人増えて、今年の第2期がスタートしました。第2期は公開レクチャーのほかに、勉強会も増え、メンターメンバーとはまた異なる舞台芸術業界の先輩制作者に質問できる機会となりました。また、定期的な中間報告では、第1期メンバーがアルムナイとしてレポートを執筆してくれたり、ラストピッチでは運営を支えてくれたりと、第1期メンバーも後方支援に回ってくれました。

第2期では、いつの間にか各チームに「道場」「保健室」「談話室」「実家」と名前がついており、メンターとメンティーの関係性や、そこで行われている営みが4グループそれぞれのありようだったのだと思います。その関係性のつくり方や、どのような話をしているのか、メンター同士の定期的な情報共有で、私自身も大きな学びを得続けた1年間でした。

昨年、第1期の活動を終え、その際の手ごたえを「制作者同士の、安心して安全な縦と横のつながりができた」と表現しましたが、今年はそこに「斜め(メンティーとアルムナイの関係性)」が加わったということがやはり大きいといえます。この「斜め」に関してはもっとアルムナイとメンティーの交流の機会をつくれたらよかったと、来年に向けての改善点もありますが、そこはぜひ第3期で回収していきたいところです。

今年の参加者もこれで活動終了ではなく、アルムナイに回って今後も関係性は継続していくので、焦らずに、丁寧に縦と横と斜めの糸を紡いでいけたらと思っています。

いつかアルムナイがメンターに回る、そのサイクルに入るまでこのプログラムが続くよう、ぜひ今後とも応援いただければ幸いです。最後になりましたが、第2期の活動も助成して下さったセゾン文化財団、アーツカウンシル東京に改めてお礼申し上げます。

植松侑子

「道場」・「保健室」・「談話室」・「実家」

植松さんが書いている通り、「バッテリー」はコロナ禍のなかで構想されたプログラムです。

この3年間、舞台芸術の世界において、コロナ禍以前からあった問題、コロナをきっかけに前景化してきた課題などが、舞台芸術を担う一人ひとりの危機として露わになりました。それに対応しようとする、大小様々な試みや新たな連帯が模索されたことも、コロナ禍のなかで生まれた副産物で、「バッテリー」も偶然だった部分もありながら、その一つでしょう。

では「バッテリー」で行われていることとは何なのでしょう？ タイトルに記されている4つの「場」は、今回の4組の“バッテリー”をメンティー自身が、あるいは別のチームのメンターがほかのチームを評した際の言葉です。ここにもゆるやかな共通性と表現されているものがあるように思いますが、私は現在、「不完全な個人であることを一人ひとりが認め、そのまま共に在ることで支え合うことは可能か？」という問いの延長に、このプログラムがあるような気がしています。

制作者は、公演・プロジェクトのエンジンとして、公演にまつわる多岐にわたる業務と責任を担い、作品が生み出される環境をつくりだします。であるからこそ、制作者はアーティストやスタッフを様々なケアする存在であると同時に、集団・個人にとっての権力者として、直接的にも間接的にも加害者になる危険性を孕んでいます。では、その重責を担う存在の「孤独」をどう支えるのか？ということが、この「バッテリー」の試みともいえます。

社会があらゆる場において個人と個人を分断し、競争を促し、自己責任の迷路に私たち一人ひとり押し込めるなか、コロナは物理的にも他者と距離を置かせ、「独り」にさせました。だからこそ芸術の場では、その在り方とは距離を置き、ヒエラルキーの形成や競争とは異なる、世代や立場を超えて支え合い、共に在れる場のつくり方を模索する必要があると考えます。誰かに支えられていることを実感する余裕がない人(ケアを受け入れられない人)が、誰かを支えること(ケアを提供すること)は困難です。

この「バッテリー」の支え合いの試みが、舞台芸術のつくり方にさえも再考と変革を促し、より良い創作環境の一助となるべく今後も継続・普及していければと考えています。舞台芸術関係者の皆様には今後ともご指導、ご協力を賜れば幸いです。

武田知也

SCHEDULE

年間スケジュール

2月

メンティー募集

メンティー募集

概ね20歳～35歳までで、3年以上の舞台制作者としての経験をもち、自身の業務に対する具体的な課題、将来へのビジョン、そして不安をもつ、制作者、アートマネージャーを募集した。

3月

審査(書類・面談)
メンティー決定

審査・メンティー決定

特定非営利活動法人Explatと一般社団法人ベンチによる審査(一次選考:書類審査/二次選考:面談)によって4名の参加者を決定した。

4月

15、16日 ファーストピッチ

メンターマッチング

メンターマッチング

参加者1名に対し、2名以上のメンターをマッチング。

5月

6月

7月

20日 第1回 中間報告会

8月

8日 第1回 レクチャー
17日 第2回 レクチャー
22日 第1回 勉強会
29日 第3回 レクチャー

メンターシップ
期間

メンターシップ

月1回～2回の定期的なメンタリング、必要に応じた適切な連絡、連携体制のもとで、日々連絡を取り合い、メンターはメンティーの活動のアドバイスなどの支援を行った。また、メンター同士の定例会も実施し、他バッテリーの課題や話題を共有し、議論した。中間報告会では、それぞれの活動報告やテーマをもうけたディスカッションなども行った。さらに、メンティーのニーズに応じ、外部講師を招いたレクチャーを3回、勉強会を2回実施した。

9月

10月

24日 第2回 勉強会

11月

16日 第2回 中間報告会
27日 第3回 中間報告会

12月

2日 ラストピッチ

ラストピッチ

東京都内で実施。期間中、計3回の中間報告会にて活動の進捗と共有を図り、最後にまとめのミーティング(ラストピッチ)を全体で行った。また、公開トークセッションをラストピッチと同日に実施し、参加者とメンターでの公開トークセッションを行い、プログラムの成果を発信するとともに、アートマネージャーのこれからを考える機会とした。